

大分県津久見市における中心市街地活性化に向けた社会実験プロセスに関する考察

福岡大学工学部社会デザイン工学科 学生会員
福岡大学大学院工学研究科 学生会員

○近藤 美沙希 正会員 柴田 久, 石橋 知也
河原 有佑

1. はじめに

現在地方都市の衰退が懸念され、中心市街地の空洞化が問題視されている。これに対し仮施設を活用した取り組みが各地で推進されており、大分県津久見市においても中心市街地の賑わい創出を目標とした津久見観光周遊性創出事業(以下:本事業)が行われている。本事業は3年間の社会実験を実施する予定であり、本研究ではその社会実験プロセスを詳述し、本事業における要点と課題について考察することを目的としている。

2. 津久見市観光周遊性創出事業の概要

津久見市は観光振興として「つくみイルカ島」や「つくみん公園」等が核となり、市外・県外から多くの観光客を集客している。しかし、マグロ漁、みかん栽培などの地域産業の低迷や、市外への人口流出による急激な人口減少などにより、津久見中心市街地には空き家、空き店舗が多く発生している。さらにこれらの問題による中心市街地の過疎化対策も津久見市の大きな課題となっている¹⁾。そのようななか津久見市は本事業を立ち上げ、大分県や地域住民、大学らと共に市街地活性化に向けて検討することとした。

3. 事業プロセスの概要

本事業の現在に至る社会実験プロセスを表-1に示す。なお本章では、本事業の社会実験実施に至るまでの検討内容やWS等の特筆すべき事項について時系列的に記述する。

(1) 津久見まちづくりの目標の共有及び現状と課題の把握

平成27年4月30日に「津久見市のまちづくりのこれからを考える」と称した第0回WSを行った。本WSでは第1回WSを開催する前段階として、協議会及びコアメンバーに参加者を絞り、参加者に対し津久見市の賑わい創出のための具体的なアイデア等、幅広い意見を求めた。グループ作業では津久見市の現状の課題や良い点、まちづくり活性化のアイデア等を抽出した。その結果、地域住民から「つくみん公園に日常的に集まる人を市街地へ流したい」等の津久見市全体の賑わいの波及に繋がる内容の意見が多く挙げられた。

(2) 社会実験の取り組みの検討

平成27年7月6日に開催された第1回WSでは、第0回WS参加者に加えその他地域住民、津久見高校の学生及び地元の大学生を交えた構成で議論を行った(図-1)。ここでは社会実験の取り組みの事例として、第1回WS打ち合わせで提示した仮施設の参考事例の紹介を行い、これらの事例を参考に議論を行った。その結果、3年間の目標に関しては参

加者から概ね了承を得たが、「2年目の目標に早くとりかかってほしい」などまちなか対策の必要性を訴える意見もあった。社会実験に関してはコンテナと移動可能なパラソルを設置して取り組みを行うことに積極的な意見が集まり、社会実験にはコンテナ及びパラソルを設置する方針とした。



図-1 第1回WS全体成果品

表-1 平成27年度における協議・作業内容のプロセス表

日付・項目	協議・作業内容
3/24 協議① 現地踏査	・関係者間顔合わせ ・全体計画の流れを共有 ・津久見市中心部まちあるき調査
4/30 第0回WS	・関係者と津久見市の商店主(コアメンバー)で地域の課題やまちづくり活性化のアイデアを抽出
6/1~2 6/6~7 つくみん公園 ヒアリング調査	【アンケート調査】 ・つくみん公園を対象とした公園利用者のニーズ調査 ・つくみん公園の利用する頻度、時間帯、目的、津久見市街地に求める物など 【商店街のまち歩き】 ・商店街マップ作成のための商店の現状把握
6/11 協議②	・第0回WSまとめ及びつくみん公園ヒアリング調査結果を報告 ・第1回WSでの検討内容を協議 ・福岡大学から実証実験の参考として仮施設(コンテナ、テント、パラソル、キッチンカー)を使用した先行事例の紹介 ・3年間の目標案の検討
7/6 第1回WS	・第0回WSメンバーに加え津久見高校と大分大学の学生8名が参加 ・事業の3年間の目標案を確認、共有する ・社会実験の内容を検討する
8/27 協議③	・新たにコアメンバーより3名が協議に参加 ・つくみん公園に向き、コンテナの大きさや設置予定箇所の確認 ・第2回WSでの検討内容を協議
9/2 第2回WS	・つくみん公園に向き、コンテナの大きさや設置予定箇所の確認 ・コンテナの設置予定箇所及び取り組み等の提案、アイデアの聴取
10/6 事業 打ち合わせ①	・WS参加者と県市職員の計25名が参加 ・これまでのWSの振り返りおよび3年間の目標の共有、事業予算の説明に加え、コンテナのロゴ・ネーミング、ふるさと振興祭での取り組み内容、今後の運営について協議
10/20 事業 打ち合わせ②	・WS参加者と県市職員の計20名が参加 ・事務局から「コンテナ活用内規(案)」について説明 ・今後、地域住民たちが関われることや、津久見ふるさと振興祭での取組について協議
10/24・25 社会実験開始	・津久見ふるさと振興祭でのオープニングセレモニーで市長、福岡大学(柴田氏、石橋氏)、大分大学(姫野氏)、建設業協会青年部会長・副会長、津久見高校商業クラブの7名でテープカット ・コンテナのネーミングやコンテナ内での取組についてのアンケート調査の実施
11/10 事業 打ち合わせ③	・WS参加者、県市職員20名が参加 ・前回の打ち合わせ、ふるさと振興祭アンケート結果、コンテナ管理者記録などの報告 ・コンテナのネーミングおよびWSの開催、コンテナの今後の運営について協議
11/21~24 コンテナ設置後 つくみん公園 ヒアリング調査	・前回の調査と同様につくみん公園の利用頻度、利用時間帯、利用目的などに加え、コンテナの満足度、観光情報の設置による利用者への影響など7項目を調査
11/25 協議④	・津久見市、大分県、福岡大学が参加 ・本事業の今年度・来年度以降の取り組み、コンテナ活用内規(案)、第3回WSの取り組み内容について協議
12/4 第3回WS	・運営組織と連携したコンテナ活用のイメージの共有及び具体的なアイデアや改善策の聴取

(3)社会実験開始に向けた作戦会議

平成27年9月2日に開催された第2回WSでは、福岡大学が前協議で検討したコンテナの設置箇所及び取り組み等の提案を発表し、参加者からアイデアを聴取した。これより、コンテナの設置箇所としては提案通り築山上に設置することで概ね了承を得た。コンテナ内の取り組みにおいても、カフェ&ショップと雑誌コーナー及び観光情報施設の併設案で運営する方針とした。特に「本は創造工房さんや市民に募る」「ファッション誌やマンガ、絵本があると良い」等、雑誌コーナーの運営に関する意見を多く抽出できた。また運営者、運営方法については個人名や団体名などの具体的な意見が挙がるよう促した。

(4)社会実験の開始

平成27年10月24日より、つくみん公園の賑わい強化を図ることを目的に設置されたコンテナの社会実験を開始した。当方は土・日・祝日の10時～17時をコンテナの開錠時間とし、主にコアメンバーが当番制で管理していくこととなった。社会実験開始日は来場者数約2万人規模の津久見ふるさと振興祭の実施日に合わせて開始し、まちづくりの拠点となるコンテナの存在を市民へ盛大に周知させる場となった。コンテナ内は雑誌コーナー及び観光情報を提供する場として開放され、コンテナ内で本を読む高齢者やウッドデッキに座る家族連れで賑わった(写真-1,2)。

(5)事業打ち合わせ会

社会実験の実施前後に市役所及びWS参加者で津久見のまちづくりについて考える「事業打ち合わせ会」が自主的に計3回開催された。ここでは社会実験の開始に伴い、コンテナ運営の仕組みづくりやまちづくり会社などの組織の設立について前倒しで議論がなされ、参加者からは社会実験に対する早急な取り組みを求める声が多く挙がった。

(6)コンテナ活用に関する内規案についての検討

平成27年12月4日にコンテナの名称決定及びコンテナ活用に関する内規案・運営イメージの共有を目的とした第3回WSを開催した。まず大学からコンテナ活用に関する内規案・運営イメージの提案を行い、グループ作業に取りかかった。グループ作業ではコンテナ内で事業を行う者の利用に至るまでの流れに関して「利用申請は随時受付がよい」「内規で使われている言い回しや判断基準が難しい」など利用のしやすさや内容の分かりやすさを重視する意見が多く挙がった。またコンテナの活用を管理・持続するにあたり運営組織を設立することはWS参加者の共通の認識であり、「活動的な組織が必要」「社会実験終了後にはまちづくり会社にする」など将来の運営組織の方向性についても議論した。

4. 本研究の成果



写真-1 ウッドデッキの様子 写真-2 コンテナ内の様子

(1)コアメンバーと第三者との連携の重要性

本事業では事業の滑り出しとして、地域のまちづくりに関して自主的・自発的な人々を集め、第0回WSを行うなどコアメンバーを筆頭に検討を重ねてきた。特にWSでは本事業の対象地の人間関係が密接であることから、「○○については○○さんがやればよい」など参加者間の距離感が近いコミュニティならではの発言が促された。これにより、具体的かつ協力的に行うことの出来る実現性の高い提案が行われた。また本事業では大学が参画し、津久見市やWS参加者らに社会実験を行う際の専門的なアドバイスや運営組織の設立にあたっての他事例の紹介などを行ってきた。第三者の参画によって具体的に動き出した事業の展開は市民に当事者意識を生み、地域の人々が定期的に地域のまちづくりについて考える「事業打ち合わせ会」を開催する等、運営組織を立ち上げるにあたっての機運醸成にも繋がった。以上のことからまちづくり事業を行うにあたり、事業の核となるような協力的で行動意欲を持ったコアメンバーの参画と事業にまつわる第三者の助言は事業を早急かつ円滑に進め、これらが協働することで行き詰まった事業を打開させる契機となりうることを示唆された。

(2)空間の見える化が及ぼす意識の向上

前述したように本事業では大分県、津久見市のみならず大分大学と福岡大学が参画し、これら学識者がWS参加者に対して具体的な提案や助言を行ってきた。これにより、社会実験ではコンテナを導入した取り組みの提案がなされ、短期間でコンテナの設置、運営までに至った。その結果、今まで見てとれなかったつくみん公園と市街地を繋ぐ空間が創出された。このことより、地域住民がコンテナ内の活用方法について議論する姿や事業の3年目に議論する予定であった運営体制について「もっと初期段階で議論するべき」との意見が挙がる等、地域住民の事業に対する積極的な姿勢が見受けられるようになった。このことから、ひとまず目に見える形として空間を形成することは、地域住民ならびに行政関係者の意識向上を促す契機となり、住民主体のまちづくりに結実する社会実験の効果に繋がるものと考えられる。

参考文献

- 1) 津久見市：都市計画マスタープラン 全体構想「都市の特性・問題点と課題」資料